「男、突っ走る！」

第67回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（22）	『オフィスツリーイン』代表	
國村　英作（51）	まちづくり会社社長	
伊藤　理沙（32）	若手起業家	
大島　幸次（51）	広告制作会社社長	
橋崎　悟（47）	ＷＥＢ会社社長	
国枝　佐代子（57）	市民映画プロデューサー	
国枝　正雄（57）	佐代子の夫	
鈴川　良江（68）	広告制作会社営業担当	
黒田　武彦（45）	市議会議員	

1　木内家・表（朝）

玄関のドアに、しめ縄が飾られている。

N「二〇一八年の新春を迎え、年明け七日から僕は仕事初めとしました。相変わらず、地元のフリーペーパー『デイズ』と、隣町のシニア向けフリーペーパー『ぷれいす』の双方の準備に追われながらも、地元の商工会に加入したことで新年会に参加したり、自分のチラシを作成して折込をしたりと、営業宣伝活動に余念がありません」

2　同・雅也の部屋

『デイズ』がテーブルに並べられている。

N「新年を迎えると、新しい何かが水面下で動き出すことが多く、僕も『デイズ』春が正式な一号目、つまり創刊号ということになり、このタイミングで報道関係者へのプレスリリースをしたり、地元メディアに取材をしてもらおうと考えていました。思え

ば、自分ひとりでやっている以上は、自分自身をブランディングしなければならず、ＳＮＳやブログの発信、ホームページの充実など、まずは自分でできることを少しずつ……という感覚で、情報発信に注力していきました」

3　市役所・議会議場

議会が行われており、答弁台で話している黒田。

Ｎ「その中で言えば、レギュラー兼構成作家となったラジオ番組で『デイズ』の告知をしたし、共にレギュラーであるメインパーソナリティーをしている黒田議員との繋がりは活かさなければと思いました」

4　国枝家・全景（夜）

Ｎ「一方その頃、水面下で動き出していたのは、僕だけではないようで……」

5　同・リビング

佐代子がパソコンで資料作りをしている――玄関のドアの開閉音が聞こえ、夫・正雄（57）が帰宅する。

正雄「ただいま」

佐代子「お帰り」

正雄「何だ、まだ仕事してたのか」

佐代子「仕事って程のことじゃないけどね、ちょっと企画書作ってたの」

正雄「企画書？　今度はまた何するつもりだ」

佐代子「また話すわよ」

正雄「市民映画で、もう散々エネルギー使ったって言ってたじゃないか。まだ何かするのか？」

佐代子「不思議よね。大きなプロジェクトを遂行したら、もうあんな思いするのはごめんだって思うはずなのに、時間が経つとまたやりたくなっちゃうのよ」

正雄「今回ばかりは、俺は応援できないぞ」

佐代子「え……？」

正雄「正式ではないんだけど、内々で辞令が
言い渡された」
佐代子「今度はどこ？」
正雄「ベトナムだ」
佐代子「ベトナム？」
正雄「あっちの工場長のポストとして行って
ほしいって。春には、もう向こうに行くこ
とになるだろ」
佐代子「そう。まあ、あなたの海外転勤の話
はもう慣れたわ。アメリカには一緒に行っ
たし、インドは単身赴任で、次も単身赴任
でしょ？」
正雄「まあな。それに、君だっていろいろ忙
しくなったら、俺と一緒にベトナムには行
けないだろ」
佐代子「そりゃそうだけどね」
正雄「手伝ってやりたい気持ちはあるけどな。
タイミングが合えば手伝うよ」
佐代子「そりゃどうも」
正雄「何やるんだ、次のプロジェクトは」

佐代子「だから、それはちゃんと固まってから話すわよ」

正雄「家族なんだから良いじゃねえか」

佐代子「まだ企画書途中だけどね」

正雄「（パソコンの画面を見て）また、すごいこと考えるな君は」

佐代子「私、そろそろ肩書き、地域プロデューサーに変えようかしら」

正雄「地域プロデューサー？」

佐代子「だって市民映画だって、地域活性化のためにやったでしょ。田所さんとやってるラジオもそうだし、そろそろまた田所さんたちと一緒に趣味の歌手活動も再開しようかなとも考えてるし」

正雄「裏方もやるし、表にも出るし、よくやるね、感心するよ」

佐代子「表に一度出ちゃうと、癖になるというか、中毒になるというか、やめられなくなっちゃうのよね。大島さんの歩行者天国のイベントで、また出してもらおうかな」

正雄「フリーペーパーのほうはどうなんだ？」
佐代子「何とかできてるわよ。でもね、あれも続けるのは時間の問題だと思うわよ」
正雄「どうして？　大島さんのところの営業の人が来て、スポンサー集めしてくれてるんだろ」
佐代子「それはそうだけど、結局フリーペーパーっていうのは継続することが難しいでしょ。『ぷれいす』なんて、それなりのスタッフがいるんだもの、人件費のこと考えたら、それなりにスポンサー集めないとできなくなるんだから」
正雄「年末にできた『デイズ』っていうフリーペーパー、あれはどうなんだ？」
佐代子「あれは、木内君が一人でやってるから、かかる費用と言えば印刷費と少しの木内君の利益でしょ。だからそれほど負担にはならないと思う。そりゃ、スポンサー集めは同じように大変だとは思うけど」
正雄「映画コラム、書かせてもらったんだ

ろ？」

佐代子「そう。私が書きたいって言ったら、ちゃんと枠作ってくれたのよ」

正雄「その木内君っていうのは、ライターだっけ？」

佐代子「そう。確かこの間の誕生日で二十二歳を迎えたんだけどね、本当に行動力ある子なのよ。『ぷれいす』のほうでも、議事録作ってくれたり、いろいろ気づいた点も意見してくれるしね」

正雄「今度の新しいプロジェクト、その木内君にも手伝ってもらったらどうだ？」

佐代子「そのつもりよ。それに、新規プロジェクトは『ぷれいす』が関係してるから、他のスタッフの人にも手伝ってもらおうと思ってるし、田所さんにもこの話はもうしてあるの」

正雄「人を回すのが上手いよね、君は本当に。そりゃプロデューサーとして成立するわけだ」

佐代子「適材適所ってやつよ。私一人じゃ何もできないから、私が思いついたことややってほしいなってことを誰かにお願いするだけ」

正雄「けどね、それがなかなか上手くいかないんだよ、組織っていうものは。誰かに頼もうと思っても、結局上手く振れなくて自分ひとりで抱え込むことになるんだから」

佐代子「だから、私は人を選んでるの。特に重要な仕事をしてもらうときにはね。ただ一緒に仕事をしてる人に、責任ある業務なんて振れないもの。当日だけのボランティアスタッフみたいな感じで、人手が必要なときだけ頼めば良いんだから。人を見て、上手く使うのよ」

正雄「君はプロデューサーだけじゃなく、経営者も向いてるかもな。こういうタイプのほうが、組織のトップが務まるもんだよ」

佐代子「どうかしらね。けどまあ、いずれは何か自分で事業をしてみたいなとは思うわ

よ。市民映画は、あくまで地域活動であってビジネスではないんだもの。私も、そろそろ第二の人生のこと考えようかしら」

正雄「第二の人生ねぇ。俺は、今の会社あと三年で定年だけど、正直再雇用でそのまま残ろうと思う」

佐代子「良いんじゃない、それはそれで。私だってあと三年で還暦だもの。やっぱりこれからのこと考えないとね。田所さんは、高校教師退職した今なんて、いきいきといろんな活動してるでしょ。私も見習いたいわ」

正雄「今だって十分いきいきと地域のことしてるけどね」

佐代子「そうでした」

正雄「風呂沸いてるか？」

佐代子「沸いてるわよ。ご飯は？」

正雄「食べてきたけど、ちょっと小腹空いたわ」

佐代子「じゃあ、風呂入ってる間に簡単に何

か支度するわ」

正雄「ありがとう（と出ていく）」

佐代子「キリの良いところまでやっちゃおう」

と、パソコンのキーボードを打ち始める。

6　『スタイル・タウン』・事務所（数日後）

N「『ぷれいす』の年明け最初の編集会議のこと……」

國村、伊藤、大島、鈴川が既に来ており、話をしている。

伊藤「今後のことですよね……」

鈴川「正直、これからも『ぷれいす』を広めて、スポンサーを獲得するには、発行人である國村さんや編集長の伊藤さんにも、いろいろ動いていただいたほうが良いと思います。ショップ紹介と言う形で、私が飲食店をはじめ商店にアプローチをしていますが、やはり地元でやる以上は、地元の大手や中小企業の、つまりある程度協賛を出せ

る余裕のある企業にアプローチをしなければいけません。そうなると、地元で仕事をして、同じ経営者と言う立場である國村さんや伊藤さんが、企業相手に協賛を見つけていただくのが一番と思っています。（と営業資料を見せながら）通常のショップ枠だと、四分の一のスペースで掲載料が税別三万円です。二分の一のスペースで五万円。でも、企業協賛枠だったら、四分の一で十万円です。これでショップ二分の一のスペース二店舗分が確保できるんですから」

國村「それはもちろん分かってますが……」

鈴川「立ち上げの人達が、やはり積極的に動いていただかないと。私は、大島さんの会社から出向という形で来てますが、いくら営業とはいえ、『ぷれいす』の資金調達全てを私が担当するわけにはいきません」

國村「……」

大島「よっちゃんとも話してたんだけど、経費削減のために、例えばページ数を減らし

たり、紙質をもう少し薄いものにしたりは
できないかなって話はしてたんだよ」
伊藤「ページ数や紙質を変えると、費用は抑
えられるもんなんですか？」
大島「まあ、極端に抑えられるわけではない
けどな。あと、これは正直あまり、俺の仕
事柄進めたくはないんだけど、印刷会社を
変えるとか」
鈴川「大島さん……」
大島「いや、分かってる、分かってるよ。で
も、正直極端にコスト抑えようと思うと、
これが一番早いんだよ」
國村「印刷会社を変えるって、どういうこと
ですか？」
大島「地元の印刷会社となると、活版印刷で、
ある意味オーダーメイドだったり、納期も
早かったりして、結構コストはかかるんだ。
もちろん、それなりに質の良いものである
ことは確かだ。でも、正直それと同じぐら
いの高品質で、かつ低価格で印刷ができる

のが、ネット印刷だ」

伊藤「ああ、確かに私は、いつもチラシや名刺はネット印刷でお願いしてます」

大島「ネット印刷は、紙質や体裁を選択して、データをそのままウェブ入稿すれば、後は向こうが発送してくれるのを待つだけで、コストはおおよそ三分の一から四分の一まで抑えることができる」

國村「そんなに変わるんですか？　印刷会社を変えるだけで」

大島「そういう事情があって、今地元の印刷会社っていうのは、ほとんどネット印刷に仕事を持っていかれるんだよ。だから、紙の印刷だけじゃやっていけないから、今は印刷会社の中でホームページ制作を請け負ってる企業もあるんだ。ある意味、紙のデザインからウェブのデザインに変わっていくようなもんだから。ただ、そうなると、地域のフリーペーパーなのに、どうして地元の印刷会社を使わないのかって、悪く見

られる覚悟はしないといけない。特に、ここみたいにまちづくり会社って謳ってる企業が、目の前に印刷会社があるのに、コスト削減のためにネット印刷にしたなんて言ったら、印象悪いだろ」

國村「まあ、それはありますね……。商店街でお互いに仕事をしている以上は、お互いにお金を落とし合うのが一番ですからね。今、大島さんがおっしゃったように、うちはまちづくり会社ですから、尚の事……」

大島「だろ。だから、あまり俺はこの案は出したくないんだ。せっかくなら、地元で作ったほうが良いに決まってるんだから」

伊藤「なかなか難しいですね」

大島「正直、今の話を考えると、やっぱりページ数を抑えて、紙質を変えることしかできないだろうな。今の人員をこれ以上削るのは無理だろうし」

國村「もちろんです。国枝さんだって、橋崎さんだって、木内君だって、それぞれに必

要な人材ですから」
大島「だろ？　今この編集メンバーで抜けられたら、一番困るのは國村さんや理沙ちゃんだからな」
伊藤「一人抜けたら、その分の負担が誰かに行くってことになりますもんね。特に橋崎さんのウェブや、木内君の原稿執筆なんて、私じゃ変われないですもん」
國村「それは僕だって。やっぱり、ページ数抑えて、紙質を変えるのが一番ですかね」
伊藤「この話は、また改めて考えましょう。それか、今日の編集会議の時でも皆さんから意見聞きましょう」
鈴川「春号制作に向けて動き出してますから、なるべく早く打開策を見つけたほうが良いと思います。今日聞けるなら、今日皆さんに聞いたうえで意見をまとめて、國村さんか伊藤さんが結論出してください」
國村「分かりました」
伊藤「はい」

と、雅也、橋崎、佐代子が入ってくる。
雅也「おはようございます」
橋崎「おはようございます」
佐代子「おはようございます」
國村・伊藤・大島・鈴川「おはようございます」
國村「じゃあ、皆さん揃ったので編集会議始めましょうか」
佐代子「あ、その前にちょっとよろしいでしょうか？」
と、企画書を一堂に配っていく。
佐代子「今日は、ちょっと皆さんにご相談したいことがあって」
雅也「（企画書を見て）『市民公募補助金トライアル事業』って、これ何ですか？」
大島「おお、やっぱり国枝ちゃんは、これに応募するんじゃないかって思ってたよ」
佐代子「毎年夏、ここの商店街で夏祭りが開催されてます。地元の人だけじゃなく、市外が県外の方も数多くいらっしゃいます。

今年の夏、大島さんが会長を務めている夏祭りの協賛会が主催となって、市民団体に補助金を出してイベント企画を委託するというものがあるんですが、それに応募してみようと思うんです」

鈴川「それは別に良いと思いますけど、どうして私たちに？」

佐代子「この『ぷれいす』が事務局となって、この企画をやらないかと思ってるんです」

雅也「企画って、何やるんですか？」

佐代子「次のページを見てみてください」

一同、企画書のページをめくる。

雅也「（企画書を見て）市民ミュージカル？」

佐代子「はい。一般公募で若い子たちを集めて、市民ミュージカルをしようと思ってるんです。ついては、このミュージカルの事務局として、皆さんにお手伝いいただけないかなと思って」

雅也「僕、やります」

佐代子「本当？」

雅也「これまで脚本という立場で、エンタメを作る一端を少なからず担ってきましたし、これも何か一つの経験になるかもしれませんし」

佐代子「ありがとう」

橋崎「僕も、事務局や総務は慣れてますから、それでもよろしければ」

佐代子「ありがとうございます」

大島「面白意図は思うんだけど、申し訳ないけど、俺は協賛会の会長だから、立場上一つの団体に関わると公平性にかけちゃうんだよな」

佐代子「（苦笑して）分かってます」

鈴川「私もお断ります。私はあくまで大島さんの会社からの出向なので」

國村「僕も、手伝ってはあげたいですけど、それほどお役に立てることがあるかどうか」

佐代子「立場上、國村さんはこの市民ミュージカルの実行委員長と言う形で携わっていただければ。それほどの負担にはなりませ

んよ」
國村「そうですか」
伊藤「私も、最近拠点が名古屋になってるので、こっちに来ることがあまりないんです。ミュージカルとなると、こっちでの準備とかいろいろありそうですし、私は遠慮させていただきます」
佐代子「分かりました。じゃあ、基本的には事務局は私と橋崎さんと木内君で担当します」
國村「分かりました、じゃあ編集会議始めましょうか」
一同「はい」
雅也「（佐代子に小声で）他にスタッフとか、いろいろ決めてるんですか？」
佐代子「まあね。田所さんっていたでしょ」
雅也「ああ、ラジオでご一緒した」
佐代子「そうそう。田所さんに、会計をお願いしようと思ってる」
雅也「なるほど。あ、それで僕は何やったら

良いんですかね。事務局っていうのは、あんまりやったことがなかったので」

佐代子「まあ、今と同じような感じよ。議事録とか、たまにＳＮＳをアップしてもらうとか」

雅也「僕、映像の脚本の経験はあるんですけど、舞台のことは全然分からなくて。いろいろ勉強させてください」

佐代子「もちろん。私も、そこまでがっつりは分かってないから。ちゃんと専門の人にお願いする予定よ」

雅也「楽しみにしてます」

Ｎ「これがやがて、僕の人生に大きな影響を及ぼすことなど、この時はまだ知る由もありませんでした」

つづく